メカライフな人々 No.11

左：塩崎秀正元コーチ・右：田上俊一元選手

第34回技能五輪国際大会　金メダリスト
株式会社　デンソー技研センター

デンソー工業技術短期大学校　田上　俊一氏
技能開発部グループリーダー　塩崎　秀正氏

旋盤加工，フライス盤加工といった機械加工から，電子機器組立，はては散髪，日本料理などまでさまざまな「技能」を競う技能五輪．県予選，全国大会を経て，国と地域の代表が競い合う世界大会は2年に1回行われる．1997年スイス，TVのドキュメンタリー取材の中，精密機器組立部門において，図面の寸法ミスを指摘して優勝という劇的な勝利を飾った田上俊一氏．コーチである塩崎氏との話が注目を浴び，漫画※1も出版され，多くの日本人に感銘を与えた．今回の「メカライフな人々」ではそんな感動に影響されたメカライフ学生委員の希望により，塩崎コーチと田上氏のダブルインタビューが実現した．

今回のインタビューのため，メカライフ学生員は春休みを利用して愛知県安城市にあるデンソー技研センターまで出張．同社の生駒社長と，同社技能開発部の杉浦部長にも加わっていただき，技能の神髄，指導のあり方に迫った．

―金メダルをとるにはこれまでのどういう積み重ねが必要だったのでしょうか…．

塩崎氏（以下：塩崎）：田上の場合，製品の扱いが全然違うんですよ．例えば，普通の人は，きれいな品

※1　ひろゆうこ，ビジネスコミック社，マンガ技能五輪―ミクロンの世界でメダルを競う―，(1998)，日刊工業新聞社．

物を作りましょうというと，品物を最後に磨いてきれいにできましたというんですけど，金属っていうのは，最初の段階から穴一つあけるのも，傷をつけないで穴をあけるやりかたもできるじゃないですか．それには気を使って，手間もひまもかかりますが，それを田上ができたっていうのがいちばん大きいと思いますね．

ものづくりって突き詰めていくと，いかにきれいなものができるかっていうことが非常に大きなファクターを占めてきます．それは，一般のみなさんにとっても，きれいだから欲しいなっていう気持ちになってきますし，品物の精度を見た場合には，例えば汚れが一つあったら，それでもう1 000分の一とか1 000分の二の誤差が出てくる．それくらいきちんときれいにしてないと，なかなか測定そのものもしっかりできません．汚い状態で品物が擦り合えば，当然傷もついてきます．そういう気配りが確実に，非常に高いレベルでできたっていうことが，彼が優勝できたいちばんのポイントになっていると思います．きれいにするっていうのは，本当にすべてのことにつながってきます．最後の1位2位の分かれ目は，どれだけきれいな仕事ができるか．きれいな仕事っていうと，じゃあ，きれいにしましたよ，という簡単なものじゃないんですよ．

―テレビや漫画の中の写真を見ていると，すごく集中してやっている姿が印象に残っているんですが，集中力をつけるトレーニングはどのようにしているのでしょうか？

塩崎：それは当たり前のレベルで，本当は集中したことを習慣化できないと意味がないんですよ．例えば，きれいな品物を作って，毎回きれいにしなくちゃって言いながら仕事をしている人と，それは当たり前という人がいる．そういう人は何も違和感なく，品物を扱うときには自然に手が動く．ものを置くときもそうですが，置く位置にちゃんとわかってすっとおける人，それで全然違いますね．カッターや刃物でも，ある位置に確実に戻せるようにする．そのときもすっと持っていきますよね，その段階で普通の人は目を離すんですよ．それで次の仕事に移るんですね．そうするとどういう動きになるかというと，手は斜めに動くんですね．そうすると，刃物があったときには手を切るということが起きてくるわけなんですね．

すっと戻してそこから次の動きができる．そこまで気配り，ほんのちょっとの間なんですよ．それができるようになるのに，コンマ何秒のトレーニングがいっぱいいるんです．でもそれらのトレーニングがちゃんと当たり前にできるようになれば，何も違和感もなくできる．課題は未公開になりますから，いろんな工程を頭の中で考えますよね．それで，考えることが少なければ少ないほど，そのことに集中できるんですよ．皆さん集中するっていう意味を勘違いしてる点もあると思うんですけど，集中するっていうのはそういうことなんですよね．あれもこれもというように，そのときやることが10も20もあると，集中しきれないんですね．10あれば五つは何も考えなくてもできますよと，残りの五つに集中する．それでいい品物は作られるんですね．そういうトレーニングを積み重ねていく．その点で彼は今まで見てきた中でも最高の腕だということができると思いますね．

―田上さんは初めから才能をお持ちだったのですか？

杉浦部長（以下：杉浦）：本当に普通の人でしたよ．決して器用じゃないし．彼の場合は技能五輪の全国大会に通常3回のところ，たまたま彼は早生まれで4回出てる．私は今まで30数年担当していますが，4回出た人はいません．生活もそうですが，精神的にもそれ

左から，塩崎氏，田上氏，杉浦部長，生駒社長（当時）

だけ続かないですよ．彼からもう一回挑戦したいって言われましたが，訓練のプログラムも3年のプログラムしかないんですよ．ですから彼の4回目の出場には，日本一とるのは当たり前っていう気持ちで，全国大会の前に世界大会を目指したんです．国際大会が7月だったので，非常に短い期間だということも視野に入れて，前年の5月くらいまでは世界大会の練習をしてたんですよ．県予選は普通の人の半分の時間を目指して．それで精密機器の種目で全国大会では過去なかった100点満点で，世界の金を獲得しました．全国大会で初めは4位で，その次に3位，そして2位，最後に1位で，なかなかできないですよ．神がかり的ですよ．それで世界大会で1位で，しかも国別最高得点賞※2もいただき，野球でいうならサイクルヒットですね．普通にはできないですよ．私が思うに彼は努力の天才なんだよね．

―モチベーションがとても長くは続かないというようなことをおっしゃってましたけど，4回目に挑戦しようと思ったのは，どういう支えがあったのですか？

田上氏（以下：田上）：技能五輪の選手になったからには国際大会に出たいというのがいちばん大きな目標としてあったからです．普通，選手は3年で優勝できるレベルまでいける能力を持つんですよ．僕はそれがなかったから3回目のときに一つ下の後輩が先に優勝したんです．自分は2位でした．国際大会は2年に1回で，全国大会は毎年行われているのですが，僕が優勝できなかった最後の3年目の年は国際大会の選抜の大会ではなかったんです．次年の大会が国際大会の選抜の大会でした．次の大会で優勝すれば国際大会に出場できるわけです．もう一つは，コーチ側の考えで，僕が3年目で抜けると，次に国際大会を目指す選手が僕の2年下の後輩だから，2回目の大会になっちゃう．その子だとやはり国際大会に行ける可能性も少ないから，それで選手とコーチの考えが一致して，それでやらしてもらいました．でも，3年目が終わったときに一度は「もうやめます」って言ったんですけどね．僕に未練が残っているのをコーチが見抜いたんです．

田上氏

※2 国別最高得点賞（Best of the nation）：各国の選手の中で最高得点をあげた人に与えられる賞

―技能五輪をする上でいちばん苦しかったことは何ですか？

田上：技能五輪の練習は好きなんですけど，人間関係を悪くしてしまったことです．友だち関係が悪くて．高校を卒業した後，自分のクラスメートから5人が技能五輪に進んでここに残りました．他の25人は職場に出てったんですけど，たまたま技能五輪に選ばれたうちの3人と仲が悪くなってしまいました．そのときは会社に行っても同じ年代の子と話すことができない状態になって，訓練もやりたくなくなって，すごく悩んでデンソーもやめたいってぐらい落ち込んだんです．そのときに塩崎先輩始め，コーチが盛り上げてくれて，1回大会に出てからすぐ職場に出られるからって説得されて，じゃあ1回出てからということになりました．夏から秋の終わりくらいまではぼちぼち訓練をして1回出たんですけど，そのときに大会の本番を味わったら，考えがころっと変わってしまいました．そこからは練習に打ち込んでますね．今それを教訓にして，自分の生徒が入ってきたときは人間関係を崩すなと言うようにしています．

塩崎：田上が入った当時は古田さんという人がコーチをしていました．彼は本当に面倒見のいい親分肌で，痛くないところを上手く触ってくれるという感性がすごく高いんですね．今は指導員をやってもらってるんですけど，ケアという能力も高くて指導力もあって，こんな苦しいことやりたくないとか，こんなことして何になるんだとか，まぁみんな悩むんですけどね．でも古田さんが1年間なんとかやってみたらどうだとか，本当に一生懸命フォローしてくれるので，じゃあ一緒にやりましょうかという気持ちになったのです．それがあってこそ，今の田上があるのかなと思ってます．それで優勝もしましたし，いろんなものが見えてきましたよね．モチベーションも上がって，仕事に集中することによって，いやな人間関係が薄れてきました．本人がしっかりしてくると周りの人も自然とそう見るようになるんですよね．その相乗効果で

変わったのかなと．

―指導する側になってみて難しいことは何ですか？

田上：技能五輪の選手を終えてコーチをしているころは，選手の延長線上でもあるので楽しんで仕事をしていました．選手はコーチに言われたことをとりあえずこなしてレベルを上げていけばいいんですが，指導員になると選手ができなかったときにどうするかということを考えるようになります．そこは頭を使いますね．選手のときは全く感じなかった精神的なものとかを考える必要がありますね．

―しつけがすごく厳しいというのを伺っていますが，基本的な敬語のレベルから，教育という意味でやっていくんですか？

塩崎：やっぱりそれはありますね．自分に自信を持っていろいろな方面へ進んでいってほしいので，そうなるとルールもしっかり守らなければいけないし，相手に対してもちゃんとした話ができなければいけない．そういうことができないと自信だって生まれてこないんですね．ルールを破っているような子は，自分に自信なんて持てるわけがないんですよ．

しつけっていうのは先程のきれいと同じで，はい，今日あなたにしつけをしました，できましたっていうものじゃないんですよ．習慣的なものですから，1年かかりますし，そういうことをきちっと最初の段階でやっておかないといけない．1年経ってからやりましょうといっても，今までの悪い癖を直すのに2年かかります．だから最初の段階できちっとやっておけば，1年なら1年できっちりできるはずです．そういう意味で将来的にも自分に自信を持てるようになってもらいたい．例えば日本の社会のルール，法律も，最上限のレベルじゃなくて，守らなければいけない当然のことなんですよ．そんなことは何も意識しないで，自然の行動の中でできるようになっていかないといい社会にはなれませんしね．当然みんなから認めてもらうためには，自分自身に誇りを持って，最低限のレベルじゃなくて，もうちょっと上のレベルを目指してもらいたいのです．

塩崎氏

―最近は口の利き方も知らないような人もいると思うんですけどどうですか？

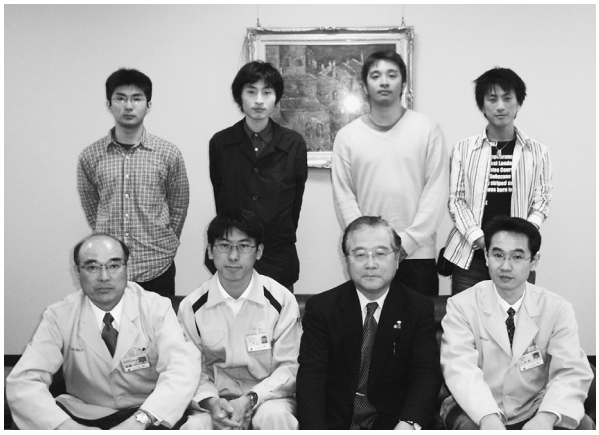
田上：やっぱり最初は敬語も知らなくて，いきなりため口っていう学生も中にはいますね．ただ逆に，ちゃんと敬語が使える子もいるので，いろいろな指導方法があります．卒業していくときには最低限の敬語と返事はできるようになって出ていきます．とにかく一日二日では絶対直らないですから，その都度，自分が言ったり，友だちが注意してくれたり，長い目でみていくしかないですね．

塩崎：あとは，人間って一人だけで敬語使いなさいって言ってもできないんですよ．みんなが当たり前に使える状況，雰囲気，環境を作ってやるのが大事だと思うんですよね．例えば五輪だと，先輩たちがまがりなりにもできるようになります．そういう環境に入ると，自然とできるようになるんですよ．今は人によっては先生を見本にしてもいいと思いますが，それよりも，周りの人とか先輩たちが，こうだぞっていうのを3年生が2年生に，2年生が1年生に，そういう流れが自然にできると，しつけ的なものも変わっていきますね．

自分にも子供がいるので，そういうしつけをしなければいけないんですけど，学校は厳しいこと言えば親御さんから苦情を言われて，そういうこともできない．それを考えたら子供の責任ってわけじゃなくて，そういう指導を受ける環境がなかったから，そういう子に育ってきてしまったわけじゃないですか．そのことを私たちは教えてあげて，それでできるようになっていくんじゃないかなと思います．

―立場が人を育てるというのはありますよね？　自分はみんなの代表なんだっていう意識が変えていくのですね．

塩崎：それは一つの人を育てる上でのポイントだと思いますね．あなたはみんなの期待を背負って，トレーニングに行くんだよ．あなたの行動は常にみんなから見られていますよと．それをプレッシャーに感じる子もいるんですけど，それをそうだよねって納得で



前列左より杉浦部長，田上氏，生駒社長（当時），塩崎氏，後列は取材陣

きる子は，自然といろんな面で変わっていきますし，人から言われたことをだんだんと素直に聞けるようになっていく．

―プレッシャーが誇りや支えになるようなところがあるのですね．

杉浦：当然そういう形になってきますよね．例えば，精密機器組立部門の場合ですと，6連覇．6連覇というと12年間世界一を明け渡してない．先ほど塩崎が言ったように，先輩たちが培ってきたものがあって，プレッシャーも感じるんですけど，プレッシャーを超える自信や誇りにつながると思います．

塩崎：技能を上げていくために，先生がいろんなことを教えるんです．でもその教えられることをそのままやるわけじゃないので，教えられることに田上なりのいろんな工夫を加えるんです．刃物一本でも1年経てば切削条件やデータなどいろいろなものが変わります．私たちは極限を追い求めますので，どういう条件で使ったらいいのかというのは，本人たちがデータにまとめ上げるんです．田上が卒業したら，そのデータは，自分が今までやってきたもの＋αになりますよね．そのことをベースにして次の世代を教える訳ですよ．

先生のところに早く来い，早く来いってやってるのではなくて，自分のところまですっと引き上げておいて，あとはターゲットはここねって言って選手と一緒に二人三脚で歩いて行ける，それが新しい未来を切り開いていくって言うんですかね．今までにないレベルを達成していくっていうことが非常に大きなウェイトになると思います．

そういう意味では，先生の言っていることも1年経つと1割は変わりますね．去年は100％正しかったんだけど，来年は同じことを言うと1割くらい間違っている．それくらいじゃないと進歩していきませんし，そういうことに先生自身が気づいていかないと，やっぱり次の進歩はないですね．俺は先生だからってやってると，それでストップしてしまいますね．先生が自分のレベルを超えていかないと，結局は生徒も上のレベルにいくことはできませんからね．

―最後に機械系学生，若い技術者へのメッセージをお願いします．

塩崎：大事なものには，見えるものと見えないものっていうのがあると思うんですよね．見えるものはやっぱり誰でも目がいくんですよ．会社で言うと売上げ伸びてますよ，下がるとすごく大変，誰でもわかりますよ，でもそれを支えている目に見えないもの，それがなんなのかというのを，そこまで掘り下げて，いろんなことを見てもらいたい．会社の中でもそうですし，技能の世界でもやっぱり同じです．先程きれいな仕事という話をさせてもらいましたけど，そういう見えないものがしっかり積み重なってこそ，初めてまともなものになってきますのでね．やっぱり世の中の見えないものほど大切なものが多いと思います．人間の気持ちでもそうですし，ものづくりでも会社だけよければものができるわけじゃありません．ものづくりを支える上には，材料もちゃんと用意しないといけないし，そのできた製品も運ばないといけない．そういうものをトータル的に，きれいな花を見てきれいだねというんじゃなくて，その根っこの部分もちゃんと見られるような学生さんになっていただければなと思います．

田上：今，僕は指導員をやっているんですけど，正直なところ，自分がこれからどの方向に進んでいくのか，まだ模索中です．中学時代は本当に工作が大好きで，たまたまデンソーの工業高校に入って，技能五輪にも出て，そこまでは自分のやりたいことそのものを訓練としてやってきました．ずっとデンソーにお世話になってきて，自分のやりたいことと仕事が一致してるっていうのは本当にすごく楽しいものだと思っています．みんなは大学で勉強してそれから就職すると思いますが，自分がやっていることが楽しければそのままの道で進んでいって，将来的にも楽しく仕事ができるという形を作ってほしいなと思います．なかなか難しいとは思いますが，それを第一に考えて勉強をしていってもらえたらなぁと思います．

―本日はお忙しい中，お時間をいただきましてありがとうございました．

（文責　メカライフ学生編集委員　滝　康嘉，畠中龍太，山田俊輔）